

# 法律事務所 家事手伝い

川口 世文



6

東京コンデ  
アパザルズ  
TOKYO CONTE BRIS

## 第6話「夏越圭介も真夏のトレース」 1 三毛猫

今年の夏は1週間早く夏休みをとらせていただきます。引き続きお盆休みに入るので合計2週間、カフェ〈三毛猫〉は休業。前半は女友達と軽井沢まで久しぶりの旅行にいて十分羽を伸ばしてから、先に実家に帰ってパパや子どもたちの到着を待っています――。

夏越《なごし》圭介の妻はそういつて出かけてしまった。学生時代の友人の1人が軽井沢に別荘を持っていて、かつての仲間数人とそこに押しかけていくのだという。

2人の息子はとっくに夏休みに入っている。彼ら2人と圭介の母親に迷惑がかからないように、妻の事前準備は周到だった。

昨年末、彼女は衆議院選挙の`ウグイス、の仕事を引き受けて、2週間ほど家を留守にしたことがあった。それがいい練習になったのか、上の息子はともかく、まだ甘えが残っている下の息子までが「たまにはママにも夏休みが必要だ」などとい出した。

圭介の母親も留守を預かることに妙に張り切っているし、家族はおおむね歓迎ムードなのだ。当の本人もギリギリまでカフェ〈三毛猫〉の営業をつづけ、準備に追われながらも疲れたようす1つ見せず、むしろ楽しくてたまらないといった感じだった。

妻の機嫌がいいことは、夫にとっても悪いことではない。妻が昔の友達と羽を伸ばすことに何ら問題は感じていない。強いていうなら、旅行から帰ってきた後、「うちにも別荘がほしい」なんてことをい出したらどうしようと、ちょっと心配になるぐらいのものだ。

圭介の妻は彼より1つ年上なのでとっくに40歳を越している。かつての仲間たちと再会してお互いの現在を比較すれば、いろいろと結婚生活の違いがはっきりしてくる時期だろう。

雑司が谷の酒屋の3代目に嫁《とつ》いで、ここ数年は昼はカフェ、夜はそれがワインバーに変わる〈三毛猫〉という店の昼の部を取り仕切っている。決して`左うちわ、の状況でないが、それなりに充実した毎日だから、彼女が肩身の狭い思いをすることはなく――圭介はそんな風にのんきに考えていた。

ところが、妻が旅行に出かけた直後、ワインバーの客の1人が池袋で圭介の妻を見たとい出した。正確には「よく似た女性を見かけた」といったのだが、その女性が`男連れ、だったことに気兼ねしてそう表現したままで、その客はかなり自信を持っているようだった。

その場は圭介も「そんなはずはない、うちのは軽井沢にいるんだから」と笑って受け流したが、店を閉めたころから急に心配になってきた。

こういうときに圭介の脳裏に浮かんでくる人物が1人いた。昼間の〈三毛猫〉の奥のテーブル席で、ときどき「うらないとひとさがし」という小さな看板を掲げて営業している忌野《いまわの》キワコという女性だ。

圭介は自分では彼女に「うらない」も「ひとさがし」も頼んだことはなかったが、あるとき、たまたま彼女に引いてみろといわれて引いたタロットカードが「Wheel of Fortune《運命の輪》」——しかもそれが圭介に向かって「逆さま、の向きでめくられたのを見て、キワコは「ああ、やっぱり……」と、しばらく黙り込んでしまったのだった。

彼女はそのカードの意味を詳しく話してくれなかった。その時点では彼女にもそれが何を意味するのか読めないといったのだ。

それも昨年末——あれからもう春を越えて夏に入っている。圭介はそんなに前のカードがいまだに効力を持っているのか猛烈に知りたくなり、我慢できずに忌野キワコに電話をかけた。

「確かに、今年1年ぐらいのスパンで、急激に何かが悪い方向に変化していくことがあるかもしれないね」  
電話の向こうでそういったキワコの言葉には少々無神経な響きがあったが、これだけ暑い日がつづいていればそれも仕方がなかった。

「だけどなあ、あのときあんた、やけに心配そうな顔で「ああ、やっぱり……、って、ため息ついたろ？」

「そうだったっけ？」

「そうだよ、憶えてないのか？」

キワコはあまりピンときていないようだった。

「何があっても、それは一時的なものだから、そんなに心配しなくても大丈夫よ」

彼女は代わりにそう答えたが、圭介が納得できるほど説得力のある口調ではなかった。

「なあ……こんなことをまさかあんたに頼むことになるとは思わなかったけど——「ひとさがし、を頼まれてくれないか？」

圭介は思い切って切り出した。だが、彼の気持ちも知らずにキワコはあっさりと「それは無理」と却下した。

「そんな冷たいこといわないでくれよ、こういうときの「ひとさがし、じゃないのか？」

彼は負けじと食い下がった。

「今は無理なんだってば……アタシ、来週は東京にいないんだから」

「東京にいない？……どこに行くんだ？」

「——金沢、北陸の」

「あんたも夏休みか」

まったく、どいつもこいつも——。

「そうじゃなくて、お仕事よ。少なくとも週の前半は戻れそうにない。それ以降じゃダメなの？」

「それじゃ意味がないんだ……まあ、そういう理由なら仕方ないけど」

圭介はきっぱり諦めることにした。これ以上こだわると、逆にキワコに考えすぎだと笑われかねない。ところ

がキワコは電話の向こうでしばらく考え込んでいた。

「そうね……アタシの代わりになれそうな人が1人いるんだけど、彼に相談してみようか？」

いつものように笑い話で終わらせようとしないう彼女の言葉に、圭介は心なしか不安が高まってくるのを感じて、キワコの申し出に甘えることにした。

×

「この `JANET 《ジャネット》、` というのは何ですか？」

男が差し出してきた名刺の片隅に印刷された小さなロゴマークを見つけて、圭介はそう訊ねた。毛筆体で書かれた「笈川《おいかわ》丈一郎」という名前とそのロゴマークは、ちょっとアンバランスに感じられた。

「ああ、それは `ジャパン・ネコ探し・ネットワーク、` の略ってことになってます」

浴衣に角帯を締めた涼しそうな恰好で `信玄袋、` をぶら下げてやってきた男は、圭介が出したアイスコーヒーをおいしそうに飲んだ。

休業中のカフェ〈三毛猫〉は、冷房が十分に効いていなかったが、その男は1人だけ別世界にいるみたいに汗一つかいていない。

ひょろっと背が高く、恰好が古風なので落ち着いてみえるが、年齢はキワコと同じか、それより若いだろう。サイドの髪を刈り上げ、頭頂の髪は長く残してウェーブをかけて整えている。かすかに日焼けした細長い顔にまばらに髭が生えていても、不潔な感じはしなかった。

「`ネコ探し、` か……」

圭介のつぶやき声にはかすかな落胆の色があったが、相手の男は飄々《ひょうひょう》とうなずいた。

「主に池袋界隈で……もっともそれは副業ですけどね」

キワコからは、笈川は大学で非常勤講師をやっていると聞いていた。だが、目の前に現れた彼は、大学の先生というよりも明治時代の `書生さん、` みたいに思えた。

「お願いしたいのはネコじゃなくて、私の妻のことなんですけどね……」

何か話の行き違いがあったのではないかと心配になった圭介が正そうとすると、相手の男はよく心得ているとばかりに片手を上げた。

「ええ、大体のところはキワコさんから聞いています」

それから笈川は自分が持っている `ネットワーク、` について、そして `人探し、` と比べて、 `ネコ探し、` となるとどれだけ人々のガードが下がるかについて、ゆっくり説明をはじめた。

「ふーん、なるほどねえ……」

相手の説明が終わると、圭介は自分でも妙だと思えるほど納得してしまっていた。

自分のカミさんを猫のように扱われるのは困るが、逆転の発想で、猫を探すつもりで調べてもらえたら案外すんなり何か情報が見つかるような気がしはじめた——何ととっても彼女は、三毛猫の女房、なのだから。

「それで、どこからお話すればいいですか？」

彼女が本格的に、行方不明、ということであれば、携帯電話の通話記録とか、電子メールの履歴までとことん情報を探るべきなのだろうが、今回はそういう逼迫《ひっぱく》した状況ではない。もちろん警察にも相談などはしていない。

どちらかというとな圭介の妄想に近い話で、うっかり大ごとにしてしまうと、実際は何もなかったときに却って困ったことになってしまう。何ととっても妻は、旅行にいくと明言していたのだから。

だが、厄介なことに、あれからもう1人、妻らしき姿を池袋で見かけたという人間が出てきていた。

「そうだなあ……」

笈川は腕を組んで店の天井をぼんやりと眺めた。その姿はまるで、一句、ひねりだそうとしているかのように見えた。

「ご主人としては池袋を中心とした都内と、軽井沢の女友達の別荘と、今どちらに奥さんがいる可能性が高いと思っていますか？」

しれっと鋭い質問を突き刺してくる。圭介はそう訊かれることは覚悟していたが、自分でも答えを用意できていなかった。

実は妻が残していったはずの、軽井沢での滞在先のメモがどこにも見当たらなかったのだ。母親も息子たちも知らされていなかった。友人たちの名前も圭介には調べようがない。

これをそそっかしいと思うか、怪しいと考えるか——それが人生の分かれ道だった。

「たぶん……」

一瞬、自分の考えを言葉にすることがためらわれた。

だが、圭介はつづけた。

「……妻は都内にいるんだと思います」

「なるほど……そうですか」

笈川はその人畜無害な優しい目に、ちょっとだけ圭介に対する同情心を浮かべていた。

「わかりました。では、まずは池袋の目撃情報から追いかけてみましょうか？　そこなら守備範囲ですからね、いきなり軽井沢まで主張するより都合がいい」

金色の懐中時計を取り出して時刻を確認した。

「早速、行ってみましょう」

和服の男は圭介を安心させようとする柔らかい笑顔で1つうなずくと、アイスコーヒーを飲み干し、その場に

キリッと立ち上がった。

※この作品はフィクションです。

(2013年7月8日公開 ©Seven Kawaguchi 2013)